

## 同一指示条件と定／不定の区別

上山, あゆみ

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 准教授 : 生成文法、日本語統語論

<https://doi.org/10.15017/16883>

---

出版情報 : 文學研究. 107, pp.185-203, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :



# 同一指示条件と定／不定の区別

上 山 あゆみ

## 1. 定 (Definite) と不定 (Indefinite)

定 (Definite) / 不定 (Indefinite) という概念は、言語学において頻繁に言及される概念でありながら、その定義が必ずしも明瞭でないものの1つである。本論文では、Definite / Indefinite は、言語表現に対応する、意味としての脳内表象が持つ特性の1つであると仮定し、それぞれ、次のように特徴づけられるものであるという考え方を提案したい。

- (1) a. Definite ... その脳内表象が結び付けられている個体 (individual) を何らかの意味で話者が直接見知っており、特定可能である場合
- b. Indefinite ... その脳内表象が結び付けられている個体について、話者がその特定はできないが、存在は想定している場合

たとえば、ア系列指示詞は常に Definite であり、その指示対象が Indefinite である場合には、容認されない<sup>1</sup>。

- (2) 刑事1：今さっき警官がああ封筒を届けると言って持って行きましたよ。  
(刑事2は、それが誰なのか見当がつかないが、あわてて。)  
刑事2：a. そいつはどこだ！  
b. \*あいつはどこだ！

(3) 正男：この前、高校生からチョコレートもらっちゃったよ。

(陽子は、そのチョコレートを見ていない。)

陽子：a. ねえねえ、それ、食べた？

b. \*ねえねえ、あれ、食べた？

(4) 秘書：昨日、学生さんが1時間以上、お帰りを待っていたようでした。

(教授は、その学生が誰なのかわからない。)

教授：a. 昨日来たその学生、名前 何だった？

b. \*昨日来たあの学生、名前 何だった？

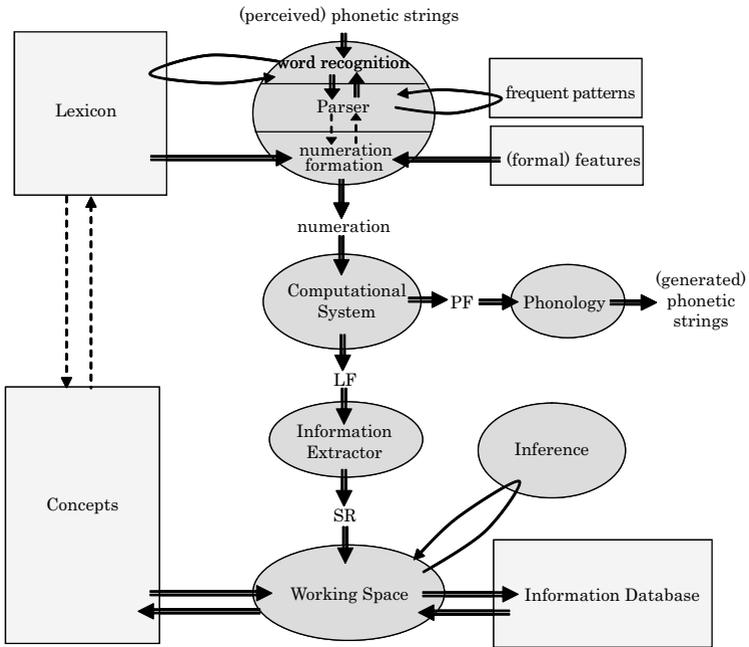
(2b)-(4b)が容認されないのは、それぞれの例文の「警官」「高校生」「学生さん」などの表現がIndefiniteを指しているからである。

以下、特に(1)の定義に基づいた使い方をする場合には、「定／不定」ではなく、「Definite／Indefinite」という用語を使うことにする。本論文は、指示対象がDefiniteである場合とIndefiniteである場合とで、同一指示のための条件が異なることを示し、(1)のような区別が必要であるということを主張するものである。

## 2. 前提：枠組の全体像

ここで仮定している枠組は上山（2008）とほぼ同様で、その全体像は(5)の図のようになっている。かなり多岐に渡る図になっているが、本論文に特に関わるのは、その中でSR（Semantic Representation）というものの位置づけだけである。SRとは、Working Space内に存在する表示であり、この集積そのものが人間の「知識／理解」であると考えている<sup>2</sup>。

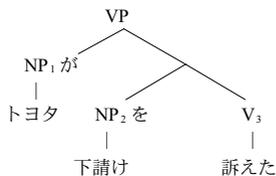
(5)



言語の生成システムである Computational System からの出力である LF は、Information Extractor (情報抽出装置) において、SR の形式に変換される。たとえば、(6) のような文の場合、(7) のような LF 表示が構築され、それが (8) のような SR に変換される。

(6) トヨタ<sub>1</sub>が下請け<sub>2</sub>を訴えた<sub>3</sub>

(7) LF :



(8) SR :

$x_1$  : トヨタ

$x_2$  : 下請け

$e_3$  : 訴えた( $x_2$ )( $x_1$ )

この枠組において、表現と指示物との間の関係は、表現がになう指標(index)によって表される。(8)のSRでは、合計3つの存在物が導入されている。 $x_1$ と $x_2$ は、いわゆる個体であり、それぞれ「トヨタという名称である」「下請けである」という特性を(8)で記されている。 $e_3$ は、いわゆるイベント(event)としての個体であり、これにも指標が付けられている。

### 3. Definiteな個体を指す表現間の制限

#### 3.1. 現象の記述

上で述べたように、ここでの枠組では、それぞれの表現が持っている指標によって、その表現がどの個体に対する述語付けをしているかが決まる。したがって、同じ指標を持った名詞句は、必然的に、同じ個体に対応することになる<sup>3</sup>。

- (9) a. 高橋課長<sub>1</sub>が課長<sub>1</sub>の部下にあいさつした  
b. 太郎<sub>2</sub>があいつ<sub>2</sub>の先生になぐりかかった  
c. 太郎<sub>2</sub>が彼<sub>2</sub>の母親に文句を言った  
d. 花子<sub>3</sub>が彼女<sub>3</sub>の友達にあやまった

上山(2008)で述べたように、2つの表現が特定の構造関係にある場合、同一の個体を指示できないという現象が知られている<sup>4</sup>。

- (10) a. [高橋課長<sub>1</sub>が課長<sub>1</sub>の部下にあいさつしている] (ところを目撃した人がいるらしい。)

- b. \*[課長<sub>1</sub>が高橋課長<sub>1</sub>の部下にあいさつしている] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- c. [課長<sub>1</sub>の部下が高橋課長<sub>1</sub>にあいさつしている] (ところを目撃した人がいるらしい。)

この現象は、「束縛条件C効果」の名のもとに論じられる場合もあるが、この場合だけ特別に「束縛条件D効果」と呼ばれていることもある。同様の現象は英語でも見られ、Lasnik 1976, Evans 1980, Reinhart 1981, Reinhart 1983, Lasnik 1991などで様々な一般化の述べ方が議論され、またHoji 1990では、日本語のどのような表現において同様の現象が見られるかが詳細に論じられた。

この現象については、たいていの一般化でc-commandという構造関係が言及される。

(11) C-command (c 統御) :

AがBとMergeしている場合、Aは {BおよびBにふくまれているものすべて} をc-command する。

つまり、上の例で言うと、「課長」という表現が「高橋課長」という表現をc-commandしている場合、「課長」と「高橋課長」は同じ個体を指せないのである。

次の(12)-(14)でも、基本的に同様の現象が見られる。

- (12) a. [太郎<sub>2</sub>があいつ<sub>2</sub>の先生になぐりかかった] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- b. [太郎<sub>2</sub>が彼の母親に文句を言った] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- c. [花子<sub>3</sub>が彼女<sub>3</sub>の友達にあやまった] (ところを目撃した人がいるらしい。)

- (13) a. \*[あいつ<sub>2</sub>が太郎<sub>2</sub>の先生になぐりかかった] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- b. \*[彼<sub>2</sub>が太郎<sub>2</sub>の母親に文句を言った] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- c. \*[彼女<sub>3</sub>が花子<sub>3</sub>の友達にあやまった] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- (14) a. [あいつ<sub>2</sub>の弟分が太郎<sub>2</sub>の先生になぐりかかった] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- b. [彼<sub>2</sub>の一番の親友が太郎<sub>2</sub>の母親に文句を言った] (ところを目撃した人がいるらしい。)
- c. [彼女<sub>3</sub>の代理人が花子<sub>3</sub>の友達にあやまった] (ところを目撃した人がいるらしい。)

そこで問題になるのは、これらの表現間にあるのはどのような特性かということである。上山 (2008) では、「 $\alpha \subset \beta$ 」という関係概念を(15)のように定義し、この現象にはこの概念が関わっていると提案した。

(15)  $\alpha \subset \beta$  の定義：

Expressions  $\alpha$  and  $\beta$  stand in the relation of  $\alpha \subset \beta$ , iff for any individual  $\chi$ ,

$[\chi : \alpha] \vdash [\chi : \beta]$  かつ

$[\chi : \alpha] \not\vdash [\chi : \alpha]$

$\vdash$ というのは、推論として導くことができるということを示す記号であり、 $\not\vdash$ のほうは、その否定 (すなわち、推論として導くことができないということ) を示す記号である。(15)はつまり、「 $\alpha$ という表現で呼べる／指せる人」は $\beta$ という表現でも呼べる／指せるが、「 $\beta$ という表現で呼べる／指せる人」が $\alpha$ と

いう表現で呼べる／指せるとは限らない、という状態を表している。上記の例文で用いた表現について、この関係を書くと、次のようになる。

- (16) a. 高橋課長⊂課長  
 b. 太郎⊂あいつ  
 c. 太郎⊂彼  
 d. 花子⊂彼女

(15)の概念を用いると、ここで示してきた現象は次のような条件を仮定することによって説明できる<sup>5</sup>。

- (17) Condition on Definite Coreference<sup>6</sup> :

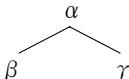
$x_n$ がDefiniteであり、 $NP1_n$ と $NP2_n$ の間に $NP1 \subset NP2$ という関係が成り立っている場合、 $NP2$ が $NP1$ をc-commandしてはいけぬ。

### 3.2. 分析

上山 (2008) では、3.1 節の現象に対して、ほぼ次のような分析を提案した。まず、LFからSRへの変換操作を次のように定義する。

- (18) LFからSRへの変換操作 :

LFのすべての部分的treeに対して、次の操作a, b, cをできるところから始め、できなくなるまで続ける。



- a.  $\beta$ に対して :

(i) index 「 $n$ 」が付いている場合には、 $\beta$ を「 $x_n$ 」で置き換え、それとは別に「 $x_n : \beta$ 」という predication を付随させる。

- (ii) indexが付いていないLF-objectの場合には、「 $\beta$ 」に置き換える。
- (iii) すでにSR-objectになっている場合には、そのままよい。

b.  $\gamma$ に対して：

- a. 同じ操作を行なう。

c.  $\beta$ も $\gamma$ もSR-objectであるならば、

- (i)  $\beta$ と $\gamma$ を合成し、 $\beta$ や $\gamma$ に付随しているpredicationも組み入れて、 $\alpha$ を置き換える。
- (ii)  $\beta$ と $\gamma$ が合成不可能ならば、「 $\beta \& \gamma$ 」を作り、ひとまず、それで $\alpha$ を置き換える。
- (iii) (ii)の結果が、最終的にpredicationになれないまま残った場合には、SR構築は失敗となる。

その上で、次のような2つの制約を提案したとする。この2つの制約を両立させられない状況が(17)の記述に相当するという分析である。

(19) 「 $x_n : \alpha$ 」と「 $x_n : \beta$ 」がある場合、いかなる $x$ についても、 $[x : \alpha] + [x : \beta]$ が成り立つならば、「 $x_n : \beta$ 」は削除しなければならない。

(20) (18c-i)の付帯条件<sup>7</sup>：

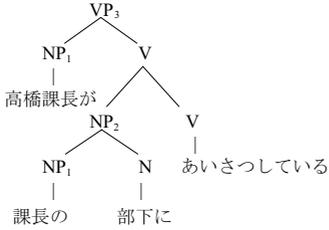
付随しているpredication 「 $x_n : \beta$ 」が合成結果の $\alpha$ の中に組み入れられる場合には、 $\alpha$ の中に「 $x_n : \beta$ 」が残らなければならない。

(10)を例にとって、この分析の説明をする。「課長<sub>1</sub>の部下」に相当するindividualを $x_2$ 、「あいさつをしている」に相当するeventを $e_3$ としよう。

(21) (≡(10))

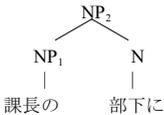
- a. [<sub>α</sub>高橋課長<sub>1</sub>が<sub>1</sub>] [<sub>β</sub>[課長<sub>1</sub>の部下]<sub>2</sub>にあいさつしている<sub>3</sub>]  
 b. \* [<sub>α</sub>課長<sub>1</sub>が<sub>1</sub>] [<sub>β</sub>[高橋課長<sub>1</sub>の部下]<sub>2</sub>にあいさつしている<sub>3</sub>]

(22) (21a)のLF :



この(22)を(18)の規則にしたがって、SRに変換していかなければならない。まず、この構造の中で(23)の部分をとって考えたとする。

(23) 部分的tree 〈1〉



この(23)の部分に(18)をあてはめると、 $\beta \cdot \gamma$ の部分のSRはそれぞれ次のようになる。

(24)  $\beta$   $\boxed{x_1}$

$x_1$  : 課長

(25)  $\gamma$   $\boxed{\lambda y. [\text{部下}(y)]}$

(24)の段階では、「 $x_1$  : 課長」という部分は、まだ組み込まれておらず、「付随

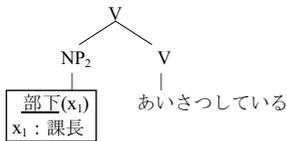
しているpredication」である。これが $\alpha$ の部分を計算する段階になって初めて組み込まれる。

(26)  $\alpha$ 

部下( $x_1$ )
$x_1$ : 課長

そのまま、次の部分に進んでいく。

(27) 部分的tree <2>



(28)  $\beta$ 

$x_2$
-------

$x_2$ : 

部下( $x_1$ )
$x_1$ : 課長

$\gamma$ 

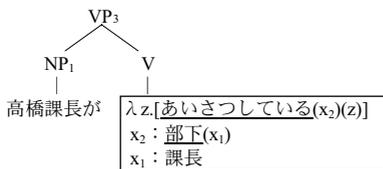
$\lambda y \lambda z. [あいさつしている(y)(z)]$
---

$\alpha$ 

$\lambda z. [あいさつしている(x_2)(z)]$
$x_2$ : 部下( $x_1$ )
$x_1$ : 課長

いよいよ、最後の部分に到達する。

(29)



(30)  $\beta$ 

$x_1$
-------

$x_1$ : 高橋課長

$$\gamma \quad \boxed{\begin{array}{l} \lambda z. [\text{あいさつしている}(x_2)(z)] \\ x_2 : \text{部下}(x_1) \\ x_1 : \text{課長} \end{array}}$$

(30)で、 $\beta$ に付随している predication は、 $\gamma$ の中にすでに同じ individual に関する predication がある。(20)にしたがうと、残るべき predication は「 $x_1$  : 高橋課長」であり、これは、(19)の制約も満たしている。したがって、この合成は適格である。

(31) (21a)のSR :

$$\begin{array}{l} e_3 : \text{あいさつしている}(x_2)(x_1) \\ x_2 : \text{部下}(x_1) \\ x_1 : \text{高橋課長} \end{array}$$

これに対して、(21b)の場合には、(32)と(33)が合成されることなる。

(32) LF 課長<sub>1</sub>

$$\begin{array}{l} \text{SR } x_1 \\ x_1 : \text{課長} \end{array}$$

(33) LF [高橋課長<sub>1</sub>の部下]<sub>2</sub>にあいさつしている

$$\begin{array}{l} \text{SR } \lambda z. [\text{あいさつしている}(x_2)(z)] \\ x_2 : \text{部下}(x_1) \\ x_1 : \text{高橋課長} \end{array}$$

これが(19)と(20)の両方を満たすためには、すべての individual について「課長(x) ⊢ 高橋課長(x)」が成り立たなければならないが、これは成り立たない。したがって、(21b)では同一指示が成り立たないのである。

#### 4. Indefiniteな個体を指す表現間の制限

さて、3節で提示した現象と一見紛らわしい現象に、次のようなものがある<sup>8</sup>。

- (34) a. ある心臓外科医<sub>1</sub>が、その医者<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。  
b. \*ある医者<sub>1</sub>が、その心臓外科医<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。
- (35) a. ある心臓外科医<sub>1</sub>の助手が、その医者<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。  
b. \*ある医者<sub>1</sub>の助手が、その心臓外科医<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。
- (36) a. ある心臓外科医<sub>1</sub>と対立していた男が、急に、その医者<sub>1</sub>の仕事をほめはじめた。  
b. \*ある医者<sub>1</sub>と対立していた男が、急に、その心臓外科医<sub>1</sub>の仕事をほめはじめた。

Hoji et al. 2003では、この現象を「Condition D' effect」と呼び、これに関与するのは、c-command関係ではなく、同一指標を持つ2つの表現 $\alpha, \beta$ の先行順序であると論じた。その論文では、 $\alpha$ と $\beta$ の関係としては、束縛条件D効果と同じく、(15)の「 $\alpha \subset \beta$ 」が関与していると考えられていたが、本論文では、Indefiniteの場合のpredicationは、必ず(37)のようになり、その点でDefiniteの場合のpredicationとは性質が異なっていると考えている。

- (37)  $x_1$  : 課長  
... $x_1$ というindividualと課長という概念が結びつけられている。

そのため、この場合も(15)が関わっていると考えerわけにはいかないの、Condition D' effectに関与するのは(39)のように定義するべき関係であると考えている。

(38) Condition on Indefinite Coreference :

$x_n$ がIndefiniteであり、 $NP1_n$ と $NP2_n$ の間に $NP1 \subset \subset NP2$ という関係が成り立っている場合、 $NP2$ が $NP1$ に先行してはいけぬ。

(39) Expressions  $\alpha$  and  $\beta$  stand in the relation of  $\alpha \subset \subset \beta$ , iff for any individual  $x$ ,

$[\chi : \underline{\alpha}] \vdash [\chi : \underline{\beta}]$     かつ

$[\chi : \underline{\beta}] \vdash [\chi : \underline{\alpha}]$

(15)と(39)の違いは、 $\alpha, \beta$ に下線がついているかどうかである。つまり、(39)に従うと、「 $\alpha$ ならば $\beta$ であるが、 $\beta$ だからと言って $\alpha$ とは限らない」場合に、「 $\alpha \subset \subset \beta$ 」が成り立つことになる。「心臓外科医」ならば、必然的に「医者」であるが、「医者」であるからと言って必ずしも「心臓外科医」であるとは限らないので、「心臓外科医  $\subset \subset$  医者」となる。(38)に従うと、この2つの表現が同じindividualを指すのならば、必ず、「心臓外科医」のほうが「医者」に先行しなければならないのである。

「 $\alpha \subset \beta$ 」と「 $\alpha \subset \subset \beta$ 」は非常に似た概念であり、このような区別が必要かどうかという議論は起こりうるだろうが、束縛条件D効果が、Definiteであるindividualについてのものであり、c-commandが関わること、そして、Condition D' effectのほうは、Indefiniteであるindividualについての制限であり、先行順序が関わるという違いは確実である。たとえば、(34)-(36)の例文をDefiniteに置き換えると、次のようなパターンになり、明らかに、(34)-(36)とは異なっている。

(40) a. あの心臓外科医<sub>1</sub>が、あの医者<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。

b. \*あの医者<sub>1</sub>が、あの心臓外科医<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。

(41) a. あの心臓外科医<sub>1</sub>の助手が、あの医者<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。

- b. あの医者<sub>1</sub>の助手が、あの心臓外科医<sub>1</sub>の患者を連れて、訪ねてきた。
- (42) a. あの心臓外科医<sub>1</sub>と対立していた男が、急に、あの医者<sub>1</sub>の仕事をほめはじめた。
- b. あの医者<sub>1</sub>と対立していた男が、急に、あの心臓外科医<sub>1</sub>の仕事をほめはじめた。

束縛条件D効果については、(19)と(20)の競合がその状況を招いているのではないかという分析案を提示した。

- (19) 「 $x_n : \alpha$ 」と「 $x_n : \beta$ 」がある場合、いかなる $x$ についても、 $[x : \alpha] + [x : \beta]$ が成り立つならば、「 $x_n : \beta$ 」は削除しなければならない。

- (20) (18c-i)の付帯条件：

付随しているpredication 「 $x_n : \beta$ 」が合成結果の $\alpha$ の中に組み入れられる場合には、 $\alpha$ の中に「 $x_n : \beta$ 」が残らなければならない。

特に(20)は、c-commandの効果을述べるためのものであるから、明らかに、Condition on Indefinite Coreferenceには関わらない。そもそも、同じような効果は、次のように文の境界を越えて見られるものなので、合成との関連で述べられるべきではないのである。

- (43) Indefiniteの場合：

- a. ある心臓外科医<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。その医者<sub>1</sub>は大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。
- b. \*ある医者<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。その心臓外科医<sub>1</sub>は大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。
- c. ある医者<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。その医者<sub>1</sub>は心臓外科医だっ

たのだが、大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。

(44) Definiteの場合：

- a. あの心臓外科医<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。あいつ<sub>1</sub>は大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。
- b. あいつ<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。あの心臓外科医<sub>1</sub>は大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。
- c. あいつ<sub>1</sub>が、うちの医局に赴任してきた。あいつ<sub>1</sub>は心臓外科医だったのだが、大変な自信家で、数々の軋轢を生み出した。

(43)、(44)からわかるのは、Definiteならば、どのような表現を使って指してもかまわないが、Indefiniteならば、そのindividualの最初の導入のあとは、陳述構文を使わずにdescriptionを増やしてはならないということである<sup>9</sup>。

5. Definite/Indefiniteの区別と言語表現

以上のように、DefiniteであるかIndefiniteであるかは、言語の仕組みの中で何らかの方法で区別されていると考えざるをえない。各言語表現にも、この区別との相性／制限がある。

	Definiteを指す	Indefiniteを導入する	Indefiniteを指す
固有名 <sup>10</sup> (太郎、花子)、固有名＋役職 (高橋課長、王監督)、ア系列指示詞 (あいつ)	○	×	×
彼／彼女 <sup>11</sup>	○	×	○
ソ系列指示詞 (その選手、その男)	× <sup>12</sup>	×	○
役職 (課長、監督、教官)	○	○	△ <sup>13</sup>
普通名詞 (選手、男、男性、日本人、小学生、女優、外科医、教員)	△		

「定／不定」の区別ということ、一般的には、英語におけるtheとaの区別が

この概念を直接反映したものであると想定されていることが多い。それに対して本論文では、むしろ、「ア系列指示詞で指しうる対象」と「それ以外」という区別が重要であるということを主張した。

4節の最後で述べた、次の一般化に注目してほしい。

- (45) i. Definiteならば、どのような表現を使って指してもかまわない。(ただし、(17)のCondition on Definite Coreferenceは適用する。)
- ii. Indefiniteならば、そのindividualの最初の導入のあとは、陳述構文を使わずにdescriptionを増やしてはならない。

この区別は、Working Spaceの中にもたらされる個体に、2種類の「理解」のされ方があると考えることによって導き出せる。Definiteの場合、Information Databaseとの対応関係が成り立っており、Information Database内の関連情報も自由に参照可能である。Definiteである限り、指示対象は自分の中では特定できているのであるから、言語表現は単にそれを呼び出すためのラベルにすぎない。 $x_1$ の「実体」を知っている場合には、その特性についての情報を必ずしも言語表現から吸収する必要がないのである。したがって、(45i)にあるように、基本的には制限がないことになる。

これに対してIndefiniteの場合、Information Databaseとの対応関係が成り立っておらず、この個体に関しては、言語表現によってもたらされた特徴づけが唯一の情報である。そのような状況でdescriptionを勝手に増やしてしまえば、どれがどれのことだかわからなくなってしまう。だからこそ、(45ii)のような制限が生まれるのである。

## 参考文献

- Evans, Gareth (1980) "Pronouns," *Linguistic Inquiry* 11-2, pp.337-362.  
Hoji, Hajime (1990) "Theories of Anaphora and Aspects of Japanese Syntax," ms., University of Southern California.

- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama (2003) "Demonstratives in Modern Japanese," in A. Li, & A. Simpson, eds., *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Asian Languages*, Routledge, pp.97-128.
- Keenan, Edward L. (1976) "Towards a universal definition of 'subject'", in C. N. Li ed., *Subject and Topic*, Academic Press, New York.
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 (日本認知科学会) 所収.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cambridge.
- Kuroda, S.-Y. (1979) "(Ko), So, A nituite (On (ko), so and a)," in *Eigo to Nihongo to (English and Japanese)*, Kurosio Publishers, Tokyo, pp.41-59.
- Lasnik, Howard (1976) "Remarks on Coreference," *Linguistic Analysis* 2, pp.1-22.
- Lasnik, Howard (1991) "On the Necessity of Binding Conditions," in R. Freidin, ed., *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, The MIT Press, Cambridge, pp.7-28.
- Reinhart, Tanya (1981) "Definite NP Anaphora and C-command Domains," *Linguistic Inquiry* 12-4, pp.605-635.
- Reinhart, Tanya (1983) "Coreference and Bound Anaphora: a Restatement of the Anaphora Questions," *Linguistics and Philosophy* 6, pp.47-88.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」, 『日本語のモダリティ』 ころしお出版, pp.211-233.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」, 『認知科学』 3-3, 日本認知科学会.
- Ueyama, Ayumi (1998) *Two Types of Dependency*, Doctoral dissertation, University of Southern California, distributed by GSIL publications, University of Southern California, Los Angeles.
- 上山あゆみ (2005) 「経験科学としての生成文法 —文法性と容認可能性—」『九州大学言語学論集』, 第25・26合併号, pp.189-213.
- 上山あゆみ (2008) 「情報抽出装置と束縛条件D現象」, 『文学研究』 第105輯, pp.61-86. 九州大学大学院人文科学研究院.

## 注

- 1 Kuno 1973以来、ア系列指示詞は話し手と聞き手の両方が指示物を理解しているときに使われる、という説明もよく言及される。しかし、Kuroda 1979で指摘されているように、話し手しか指示物を知らない場合でも、ア系列指示詞が使用可能な場合は、よくある。

- (i) A: 先生が学生だった時には、どのように勉強されたのですか。  
B: あの頃は本がなくて、本当に苦勞しました。
- (ii) ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。
- 2 SRには、Computational Systemの出力であるLFから機械的に変換されることによってもたらされたもの (linguistic SR) と、Inferenceの結果や知識データベースからの記憶の呼び起こし等によってもたらされたもの (non-linguistic SR) という2種類の出処があるが、結果物としての区別はない、と想定している。
- 3 Reinhart 1983では、個体と指標との対応関係を数学的／無機能的なものであると仮定していたため、1対1対応に制御することが出来ないと仮定されている。しかし、上山 2005以来、主張してきたように、ここでは指標の解釈に認知的な装置を仮定しているため、個体と指標を1対1対応に限ることは、不自然な仮定ではない。
- 4 (10a)と(10b)の違いは、「高橋課長」という人物が自分の直接知っている人であっても、なくても、私たちは感知することができる。しかし、ここでは、「高橋課長」に相当するindividualである $x_1$ がDefiniteであるという仮定を保持しておく。これは、私たちが「それがDefiniteとして設定されている」と想定した上で理解を進めることができることのあるわかれだと解釈したい。
- 5 以下に、先行研究における定式化をいくつかあげておく。
- (i) Lasnik 1976:16 (38)  
If  $NP_1$  precedes and commands  $NP_2$  and  $NP_2$  is not a pronoun, then  $NP_1$  and  $NP_2$  are disjoint in reference.
- (ii) Lasnik 1991:19 (51)  
A less referential expression may not bind a more referential one.
- (iii) Ueyama 1998:204 (64)-(65)  
Nominal expressions  $\alpha$  and  $\beta$  must be disjoint in reference if  $\alpha < \beta$  [i.e.,  $\alpha$  is 'less referential' than  $\beta$ ] and  $\alpha$  c-commands  $\beta$ , where  $\alpha$  and  $\beta$  stand in the relation of  $\alpha < \beta$ , iff
- (i) for every  $\chi$ ,  $\chi$  an individual which can be expressed by  $\beta$ ,  $\chi$  can be expressed by  $\alpha$ , and,
- (ii) for some  $y$ ,  $y$  an individual which can be expressed by  $\alpha$ ,  $y$  cannot be expressed by  $\beta$ .
- それぞれ、理論的背景が少しずつ異なっているため条件の述べ方も異なっているが、一般化として別の予測を持つわけではない。
- 6 Reinhart 1983では、このような条件を仮定するかわりに、この現象をSpeaker's/Hearer's strategyという、いわばParserの方略として説明しているが、日本語の現象を考えると、それが不適切な分析であることがわかる。Reinhart 1983の説明は、この現象を、

いわゆる「連動読み」に関係づけるもので、「連動読み」の方略が使えることがこの現象の存在の前提となっている。しかし、日本語話者で調べてみると、「連動読み」の方略を身につけていない人であっても、この現象は比較的はっきりと出るということがわかっているのである。このことは、この現象と「連動読み」の方略とが別の原理に支配されていることを示している。

- 7 結果的に、この部分で、LFでのc-commandの関係をSRに持ち込んでいることになる。意味のレベルにおいてもc-commandのような概念が必要であるという主張そのものは、Keenan 1976を初め、しばしば見られるものである。
- 8 (34)-(36)の例は、Hoji et al. 2003の(27)-(29)をベースにしている。
- 9 この考え方は、基本的に、田窪1989, 田窪・金水1996における主張に沿ったものである。
- 10 「田中さんという人」「メジカというところ」のように、固有名に「という」が後続する形式については、ここでは置いておく。
- 11 boyfriend, girlfriendという意味の場合には普通名詞であるので、まったく別である。
- 12 ソ系列指示詞の直示用法については、置いておく。
- 13 ここでは、いったん導入されたIndefiniteを指す場合にはソ系列指示詞を用いるのが一般的であると考えているが、日本語では、(i)のような用法もある。
  - (i) 昨晚、中央区で男が警官を襲い、拳銃を奪って逃走しました。男は、目出し帽で顔を隠しており、年齢や国籍については不明です。警官は全治1ヶ月の怪我で入院中です。その場合、「表現として同じものを用いる」ことが同じ個体を指すための必要条件である。
  - (ii) 昨晚、中央区で男が警官を襲い、拳銃を奪って逃走しました。#男性は、目出し帽で顔を隠しており、年齢や国籍については不明です。{#警察官 / <sup>ok</sup>その警察官}は全治1ヶ月の怪我で入院中です。